

高校現場最前線

No.257

【岩手県・専修大学北上高等学校】…①

校長 阿部 伸

「学び方」主導でカリキュラム改革 未来を創る学びの実践①

本校は、普通科・グローバルビジネス科（旧商業科）・メカニックスエンジニアリング科（旧自動車科）の3学科を設置し、1学年の定員は300人である。現在、全校生徒数は874人で、この5年間で200人以上増加するなど、地域内外から評価・関心をいただいている。

この要因として挙げられるのが、「学び方」から進める学科・カリキュラム改革と、学習環境のアップデートであろう。

多様な学びを支える学習環境

環境面では、2024年9月に校舎建て替えと人工芝グラウンド・外構の整備事業が完了した。設計には「学びの多様性」への配慮

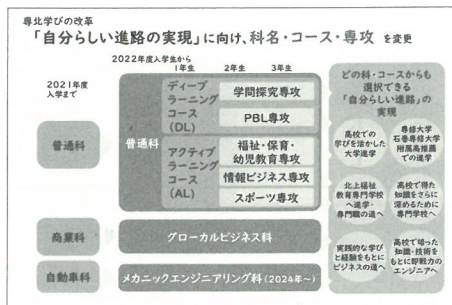
が反映され、オープンスペースの配置や可動式壁の導入など、学習環境の柔軟性と協働性を高める構造を取り入れた。加えて、ラーニングコモンズ（※）の設置により、個別学習やグループ探究に適した多目的空間も確保している。

また、本校は北上市中心部に立地し、街とのアクセスが良好である。そこで2024年には、北上市と学校法人北上学園との間で「まちなかキャンパスを核とした人材育成・まちづくりの推進に関する連携協定」を締結し、学校を地域に開き、北上市をはじめとする行政・NPO・企業などの多様な主体と連携した、深く実践的な教育活動の展開を推進している。

進路主導から学び主導へ

学びの改革の核としては、「進学逆算型」のカリキュラムづくりではなく、「学び方」からカリキュラムづくりを行った。変更前は普通科に、特別進学・大学進学・総合進学の3コースを設置し、進路に応じて時間割や補習を差別化していた。とりわけ「特進」コースでは、0時間目や7・8時間目の授業、さらには土曜授業を組み込み、詰め込み型の運用が常態化していた。しかし、教員・生徒双方に負担が大きく、学習成果も期待通りにはならなかった。

そこで2021年度以降、校内に専門部会を設け、普通科だけでなく商業科・自動車科も含めた全体的教育内容を再検討する体制を整備した。時代の変化に対応した学びの在り方を検討し、普通科は2022年度入学生から、ディ



「学び方」の視点から進めた
学科・カリキュラム改革

プラーニングコース・アクティブラーニングコースの2コース制・5専攻体制へと再編。併せて、商業科はグローバルビジネス科へ、自動車科は2024年度よりメカニックスエンジニアリング科へとそれぞれ改称した。

ディープラーニングコースは、知識の吸収にとどまらず、知を統合して問いを深める探究型学習を基盤とする。ここでは、学問探究専攻とPBL (Project Based Learning) 専攻の二つを設置。学問探究専攻では、幅広い教科との接点を生かし、自身の関心に即して学びを選び深めていく仕組みを採用している。PBL専攻では、学校設定科目「Socio (ソシオ)」を2・3年次に各4単位設け、自ら立てた問いを基に、フィールドワークやプロジェクト学習などを組み合わせ、深い探究へとつなげている。アクティブラーニングコースで

は、福祉・保育・幼児教育専攻、情報ビジネス専攻、スポーツ専攻の三つを展開している。系列大学や専門学校との連携、ならびに地域のフィールド活用を通じて、実社会と接続した知の活用と応用を目指している。例えば、情報ビジネス専攻では、市内の稲瀬地区と協働し、米づくりを起点に持続可能な地域経済について探究する「コメプロ」を実施。農業をフィールドに問いを発見し、情報技術やマーケティング視点での解決策提案を行っている。

グローバルビジネス科では、知識の暗記や資格取得に偏らず、生徒が実際に投資・仕入れ・販売を担う「専売マルシェ」を通じて、経済活動に必要な実践知を体得している。知識・実践から蓄積してきた学習が、社会における利益や地域との関係性として可視化されることで、学びの実感と責任感が

高まっている。

そして、メカニックスエンジニアリング科では、従来の自動車整備中心の学習を広げ、「いわてデジタルエンジニア育成センター」と連携し、3DCADなども活用した学びを行っている。これにより、将来の技術革新や職業変化にも柔軟に対応できるエンジニアとしての基礎力育成を目指している。

これらの学びの改革においては、教員だけで構築するのではなく、各専攻に外部専門家がメンターとして伴走することで、より専門性と協働性の高いカリキュラムとなっている。また月1回の教員研修により、その学びの質を高める取り組みを進めている。

このように、学校・教室・授業・カリキュラムを多方面に開くことで、多様な関係性が構築され、生徒にとって、より魅力的な学びの場を構築できている。